The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	サラマンドラのモティーフ : ペトラルカからロンサールへ
Author(s)	高岡, 幸一
Citation	Gallia. 1992, 31, p. 32-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9747
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

サラマンドラのモティーフ
——ペトラルカからロンサールへ——

高　岡　幸　一

中世の Bestiaires に登場する伝説的で幻想的な動物たちのうち，フェニックス（不死鳥），バジリック（背鰭トカゲ），リコルヌ（一角獣），サラマンドラ（火トカゲ）などは，Pétrarque をはじめ抒情詩人たちによってしばしば恋愛詩のコンテクストにおける装飾的なモティーフとして利用されてきた。ペトラルカはこの場合もまたその詩想をトゥルバドゥールに負うところが大きいわけであるが，以下に今回はサラマンドラに限って Pétrarque の周辺から Ronsard の周辺に至るまでこのモティーフがいかに用いられているかを考察してみよう。

サラマンドラについての古代での伝承は限られてはいるが，ギリシア語の *σαλαμάνδρα* はアラビア語の samandra（al＋samandra→salamandra）とも関連があり，一説にはこの語は原地中海民族語から来ているともされている[1]。アリストテレスには一度だけ言及されており，その文脈は重要である：「噂によれば，サラマンドラは火の中を闊歩し，この火を消すとのことである」（*ἡ σαλαμάνδρα ..., ὡς φασί, διὰ τοῦ πυρὸς βαδίζουσα κατασβέννυσι τὸ πῦρ.*）（Hist. an. V, 19）．他方，プリニウスの解説はもう少し詳しく，彼はサラマンドラの特性の冷却作用（frigorifique）にさらに毒性作用（venimeuse）を追加している：「サラマンドラは，とかげの形をした動物で，からだに星の班点をもち，大雨のときにしか姿を見せず，晴れた日には隠れている。ひじょうに冷たく，まるで氷のように，火に触れるとこれを消す。口から吐く乳状の血膿は，人間のからだのどの部分もこれに触れるとその部分の体毛すべてを削ぎ，接触箇所の膚色を白班状にかえてしまう」（... salamandrae, animal lacertae figura, stellatum, numquam nisi magnis imbribus proueniens et serenitate desinens. Huic tantus rigor ut ignem tactu restinguat non alio modo quam gla-

1）Cf. Paulys Realencyclopädie der klassischen Altertumwissenschaft, ad loc.

cies. Eiusdem sanie quae lactea ore uomitur, quacumque parte corporis humani contacta toti defluunt pili, idque quod contactum est colorem in uitiliginem mutat.) (Hist. nat. X, 188)[2]. 後者の脱毛効果については，マルティアリスにおいても (Hoc salamandra notet . . .) (II, 66, 7)，ペトロニウスにおいても (Quae salamandra supercilia tua excussit ?) (108, 15)，ユーモラスなコンテクストで言及されている。

ヨーロッパ中世においては，12世紀から13世紀にかけて各種「動物誌」Bestiaires がラテン語や俗語（フランス語）によって書かれたが，これらは皆博物誌的，教訓的，宗教寓意的内容のもので，例えば，13世紀前半の Guillaume le Clerc によれば，サラマンドラとは「尻尾も，頭も，胴体も，トカゲに似た動物で，火を恐れず，火に焦がされることはない。」(La salamandre est une beste, / Qui de la cue e de la teste / E del cors resemble lesarde, / Si n'a poor, que nul feu l'arde :) とのことである。さらに彼の説明は続き，サラマンドラは様々な色を皮にもち，その毒性は強く，リンゴの木に這い登るとその実を有毒にし，これを食する者は死に，井戸に落ちると水を有毒にし，これを飲む者も死ぬ，とのことである。その上，「この動物の象徴するところは，完璧な信仰をもち，清き生を送る賢者であり，その者は周りの放蕩の火勢や諸悪の情火を消す……」(Iceste beste signefie / Le prodhome de seinte vie, / Qui tant est de parfite fei, / Que il esteint environ sei / Le feu e l'ardor de luxure / E des vices la grant ardure. / . . .)[3]. ここでの象徴作用（"senefiance"）はこの時代このジャンルのもっとも重要な言及である。

北フランスの数々の Bestiaires の流行に比べて南フランスではこのジャンルの作品は少ないが，北のラテン語による記述および学術翻訳調叙述と異なり，ここでは一層独自な俗語（オック語）による簡明で洒落な解説が見られる。例えば，ある作者未詳の Bestiaire のサラマンドラの項には次の如く記されている：「サラマンドラは火中にのみ棲息する。その皮で服地を作ると決して火に燃えない」(Salamandra vieu de pur foc, e de son pel fa hom un drap que foc no·l pot cremar.)[4]. もはやこの動物の毒性については言及が省かれている。

もう一つこの分野での詩的工夫上有名でかつ重要であり，直接イタリア詩人，就中 Pétrarque の詩想に影響を与えたものに，13世紀前半 Saintonge の詩人，

---

2) プリニウスは他にもこれについて言及している：Hist. nat. XXIX, 74 sq.

3) Guillaume le Clerc : Le Bestiaire, éd. R. Reinsch, 1967, pp. 346-347. Brunetto Latini にも異口同音の記述が見られる：Li Livre dou Tresor, ed. F. J. Carmody, 1975, p. 135.

4) René Nelli / René Lavaud : Les Trouvadours, II, p. 678 sq.

Rigaut de Barbezieux (Barbezilh) の役割がある。今日彼の作とされるわずか9篇の cansos しか残っていないが，すべて恋愛詩である[5] これらのうちのいくつかには動物たちの直喩が目立つ。「私はライオンのように……，象のように……，フェニックスに習いたい……，鹿のように……」(Atressi com lo leos, . . . , Atressi com l'olifanz . . . , s'eu pogues contrafar Fenix, . . . , Aissi co : l cers . . .)[6] といった表現とともに貴婦人への恋慕の情が綴られている。

このようなコンテクストにおいて，次のサラマンドラに関する一聯を含む Peire de Cols d'Aurillac の canso : Si co·l solelhs nobles per gran clardat . . . も誤って Barbezieux の作に帰されたのも頷ける：

Ben es plazenz ; quon plus vey, plus m'agrat
del sieu gent cors e plus vas lieys ador ;
donc fora dregz que reguardes s'onor
e que·n agues, si·l plagues, pietat,
que·l fuecx que·m art, es d'un·aital natura
que mais lo vuelh on plus lo sen arden,
tot enaissi quo·s banha doussamen
salamandra en fuec et en ardura
e·n tra son noyrimen[7].

「彼女はまことに魅力的だ。彼女を見れば見るほど，彼女の優雅な体に対する欲望はいやまし，彼女への敬愛の念がつのる。したがって，彼女は自領を見回ってくれてもよさそうなものだし，もしよければ，私にあわれみをかけてくれてもよさそうなものだ。私を燃やしている火はとんでもない性質のもので，それがもっとも熱いと感じるところに一層それを求めるほどである。ちょうどサラマンドラが熱い火の中にゆっくりと身を沈め，そこから自分の栄養を摂取するように。」

ここでは北仏の教訓的 Bestiaire が教える "senefiance" の情念消化作用とはまったく逆に，「火を栄養としてさらに燃える」という pabulum ignis[8] の新しい発想が見られる。

イタリアにおいては恋愛詩中のサラマンドラのこのような発想は，すでに13

5) 恋の相手は，vida によれば Jaufré Rudel の娘とされている。
6) René Nelli / René Lavaud : *ibid.* p. 98 sp.
7) Appel, p. 230.
8) Cf. Gaston Bachelard : La psychanalyse du feu, éd. idées, 1965, p. 109 sq.

世紀前半のパレルモの Federico II の宮廷詩人 Giacomo da Lentini に見られる：

Foc'aio al cor, non credo mai si stingua,
　　anzi si pur alluma :
perché non mi consuma ?
La salamandra audivi
che 'nfra lo foco vivi — stando sana ;
　　eo si fo per long'uso :[9]

「わたしは心に火をもっているが，身を焦がすばかりで何時消えるとも知れない。どうしてわたしは燃え尽きてしまわないのだろう？ 火の中に棲息し，じっとしていても大丈夫なサラマンドラのことを聞いたことがある。わたしはもう随分長い間これと同じ様なことをしている。」

同じ頃 "Il mare amoroso" という，Barbezieux と同じく動物直喩をちりばめた作者未詳の作品中にもサラマンドラは見られる。ここではサラマンドラと並んで，今一つのトゥルバドゥールと Pétrarque を結ぶモティーフである蝶のイメージが置かれている：「光りの輝きを見て火に近づく蝶のように，またわたしの心が日夜火中にありたいと願うとき，その能力はすばらしく，まるで自分がサラマンドラではないかと思う」（. . . si come il parpaglion che fere al foco / veggendo il gran splendor de la lumiera ; / e la valenza, laove sta il meo core / in foco disïoso notte e dia, / tanto che mi par esser salamandra[10]）

さて，14世紀の Pétrarque になると再びトゥルバドゥールの "pabulum ignis" の側面が強調される。詩人は恋人ラウラの視線を火とみなし，危険を顧みず，恐る恐るちらりちらりとこれを盗まずにはいられない。彼はこれによって栄養を摂取すると同時に燃え上がっているからである（. . . cosi dal suo bel volto / l'involo or uno ed or un altro sguardo ; / e di cioè inseme mi nutrico ed ardo.）[11] そして詩人は続ける

　　Di mia morte mi pasco e vivo in fiamme :
stranio cibo e mirabil salamandra !
. . .
Però s'i' mi procaccio

9) Poeti del Duecento, tomo I' éd. Ricciardi, p. 52.
10) *ibid.*, p. 490.

quinci e quindi alimenti al viver curto,
se vol dir che sia furto,
sì ricca Donna deve esser contenta,
s'altri vive de suo, ch'ella nol senta.

「わたしは自分の死を糧とし，炎の中に生きる。何という奇妙な食べ物か，不思議なサラマンドラか！…… わたしが短い生涯にここかしこ栄養を得ようとあくせくするからといって，それがもし窃盗であろうとも，もし他人がその人のもので生きるなら，こんなに豊な貴婦人はそんなことを気にせず満足してほしい。」

サラマンドラは確かに Pétrarque においてフェニックスのような重要なテーマを構成しない。後者の場合，ラウラ自身の美の象徴として sonnet や chanson の随所に登場し，その先行イメージは中世の Bestiaire はもとより，北仏の Thibaut de Champagne, Chretien de Troyes から，Rigaut de Barbezieux をはじめ多くのトゥルバドゥールたちにも用いられ，さらには Pétrarque の場合，これらにウェルギリウスのディドの姿まで重複している点を別の論考で言及した[12]。これに対し，サラマンドラは ornatus としての単なるモティーフであり，直接その出典としてトゥルバドゥールたちの驥尾に付していることを上に見てきた。しかし，ここにも Pétrarque 独自の facture が見出せないわけではない。例えば，"stranio cibo e mirabil salamandra！" という一行の表現にそれが窺われる。"stranio" とは「遠くから来た (straniero)，異国の (pellegrino)，奇妙な (strano)」といったすべてを含み，あるいはそれらを越える Pétrarque 独自の connotation をもった形容詞であり，まさにラウラ自身を象徴するフェニックスを描くコンテクストにおいて，この美しい鳥の棲む「どこかある遠い国」(in qualche stranio clima) (canz. 135) とするとき，またラウラ自身を "Una strania fenice" (canz. 323) と呼ぶときに用いられている[13]。

したがって，"stranio cibo" とは「遠く異国のアラビアの砂漠に棲息すると言われる稀有なる鳥，フェニックスの如き不死の美をもつラウラという情念の栄養物」の意味である。他方，"mirabil salamandra" の "mirabile" とは，ラテン語 mirabilis のもつ「眺めるにつけ驚嘆に値する」の意味であり，古代文学

11) canz. 207 Petrarca : Rime, Trionfi e Pesie latine, éd. Ricciardi, p. 276.
12) 拙稿 "La description des beautés de Laure dans le *Canzoniere* de Pétrarque"，言語文化研究，X III (1987), pp. 32-34.
13) Cf. Fredi Chiappelli : Studi sul linguaggio del Petrarca, Olschki, 1971, p. 126 sq.

においてはしばしば奇蹟や怪物の描写によく登場する語彙である（cf. mirabile visu, θαῦμα ἰδέσθαι etc.）[14]。詩人 Pétrarque 自身を表すメタフォールのサラマンドラこそ，フェニックスと同様，古代から受継がれてきた "monstrum" 以外の何ものでもない。ここに詩人のラウラから「栄養を摂取する」姿はただ単に一個の個人的体験にとどまらず，一つの新たなミュトスを作り上げたのである。このような言葉の densité は先行詩人たちには見られなかった「ラウラの恋人」ひとりに許された独壇場である。

Pétrarque の後サラマンドラのモティーフはイタリアやフランスの数多くのペトラルキストたちによって利用される。この師に対する直系の弟子をわれわれは16世紀前半の閨秀詩人 Gaspara Stampa に見る：

> Amor m'ha fatto tal ch'io vivo in foco,
> qual nova salamandra al mondo, e quale
> l'altro di lei non men stranio animale,
> che vive e spira nel medesmo loco[15].

「アモルはわたしを世にも稀なるあのサラマンドラのように火の中で生きるものにしてしまった。そしてまたそれとは別のもう一つのもの，同じ場所に死んで生きる前者に劣らず奇妙なあの動物（フェニックス）にもしてしまった。」

表現の上では "stranio animale" は Pétrarque の "strania fenice" に通ずるが，ここで Gaspara Stampa は女性であるということでラウラと共通し，火の中で死んでは蘇生するという性状においては火中で生き続けるサラマンドラ，つまり Pétrarque 同様情火に身を焦がすものである。言語の暗示性と心情の真実性という点では実はこの夭折の女流詩人は真正のペトラルキストであったと言える。

他のペトラルキストたちは多少とも皆マニエリストである。15世紀の Chariteo は相手の恋人を「火に囲まれても燃えない」サラマンドラと喩えている：「他の者なら死んでしまう燃え盛る炎の中で喜んで生きるサラマンドラのように，貴婦人よ，あなたはわたしの胸のうちに棲み，わたしの大火をちっとも感じない……」(Si come salamandra in fiamme ardenti / Ove si more altrui, vive

---

14) Cf. 拙稿 "L'ecphrasis d'œuvres d'art chez les poètes grecs anciens", 言語文化研究, X (1984), p. 254.

15) son. 208 Gaspara Stampa : Rime, éd. Rizzoli, 1976, p. 212.

in diletto, / Cosi tu donna, alberghi intro' mio petto, / Et de l'incendio mio parte non senti . . .)[16] 同じ発想は Maurice Scève に受継がれる：「おゝ，あなたはあなたの冷たい本性によってわたしの火の中に住むサラマンドラであって欲しい。あなたはそこに好みの食べ物をもち，わたしの燃える情念を消してくれるだろう。」(O fusses tu par ta froide nature / La Salemandre en mon feu residente : / Tu y aurois delectable pasture, / Et estaindrois ma passion ardente.)[17] 「冷たいサラマンドラ」(La salamandria fría) のイメージはイスパニアの Luis de Góngora (. . . salamandria más de nieve) や Francisco de Quevedo (. . . La salamandra fría . . .) にも見られる[18]。

さらに完全な ornatus として単に列挙の中の一つのモティーフになりさがってしまう場合の例に 15 世紀後半のペトラルキスト Tebaldeo がある：「網にかかった魚が大好きな水を離れるとき，サラマンドラが火を離れるとき，……そんな苦しみを私はあなたを離れるときに感じる……」(Con quel dolor che l'amate acque lassa / Pesce iretito, e salamandra il foco / . . . / Con quel da te mi parto . . .)[19] Ronsard は「魚と水，サラマンドラと火」のこの公式が気に入ったらしく，あるときはそっくり Tebaldeo のイメージを poème de circonstance のコンテクストに移し換えている：「魚が水によって養われ，サラマンドラが爐のおき火によって養われるように，……矍鑠たるあなたも御研鑽によって養われ……」(ainsi qu'un poisson se nourrit en son eau / Et une Salamandre au brasier d'un fourneau, / . . . ta verte vieillesse / Se nourrit du travail . . .)[20]

またあるときには，すでに1552年の恋愛詩においてもこれを用いている：

> Sans vivre en toy je tomberay là bas :
> La Salemandre, en ce point, ne vit pas
> Perdant sa flamme, & le Daulphin son onde[21]

「あなたのうちに生きられないなら，わたしはそこに潰えてしまう。火を失ったサラマンドラが，波を失った海豚が同じ場所に生きてゆけない如

---

16) Cf. Henri Weber : La création poétique au XVIe siècle en France, Nizet, 1955, p. 177.
17) diz. 199 Scève : Delie, éd. Parturier.
18) Góngora : Sonetos completos, éd. B. Ciplijauskaité, 1982, p. 95 ; D. Alonso : Poesía española, pp. 623-624.
19) capitolo, 11 Tibaldeo : Opere d'amore, 1544.
20) A Jean du Thier, Ronsard : Poésies choisies, éd. Garnier, 1963, p. 383.
21) son. 72 Ronsard : Les Amours (1552), éd. Laumonier.

く。」

さらに，「火とサラマンドラ」との親密性は，船と櫂，魚と水，土と湿り，王と顧問，民衆と領主のそれに等しく，魂と肉体とも切り離し難しと，D'Aubigné は完全な Adynata の手法の中のモティーフとしている：(Que peut une galere ayant perdu la rame, / Le poisson hors de l'eau, la terre sans humeur, / Un roy sans son conseil, un peuple sans seigneur, / La salemandre froide ayant perdu la flamme ? / Que pourra faire un corps destitué de l'ame,)[22]

他方，「傷心の詩人は身は窶れ果て，木や花や動物などに次々と変貌してゆく」という，Pétrarque の canz. 23 : Nel dolce tempo... を出発点とする所謂「メタモルフォーズのテーマ」の中の列挙例の一つにもサラマンドラが登場する。Tebaldeo と同時代の Panfilo Sasso の場合がそれである：「今度はわたしは火の中に横たわるサラマンドラとなり，かと思うと，答えてくれる平穏が得られないので，早くエコー（木霊）に身を移したいと思う。」(Hor salamandra son che in foco jace. / e presto aspetto tramutarme in Ecco / per non haver mai rispondendo pace :)[23] 同じ発想を受け継ぐのが Desportes であるが，このヴァロア王朝最後の宮廷詩人は「エコーとなって貴婦人の美貌を反響させ続けたい」という pointe を追加している：

Or je suis salamandre et vy dedans la flame ;
Mais j'espère bien-tost me voir changer en vois,
Pour dire incessamment les beautez de ma dame[24].

以上見てきたように，各詩人それぞれにこのモティーフの利用にあたって独自な創意を凝らしてはいるが，決定的な réalisation はやはり Pétrarque ひとりに負っているとせざるを得ない。だがこのような結論も実際各詩人たちの使用例を横断して初めて確認されるべきものである。

(D. 1974　大阪大学教授)

---

22) son. 75 D'Aubigné : Le Printemps, éd. Weber.

23) Joseph Vianey : "Un modele de Desportes non signalé encore : Pamphilo Sasso", in RHLF, X (1903), p. 280.

24) son. 34 Desportes : Les Amours de Diane, I, éd. Graham.